

朝顔日記

五篇

遠13
962
5



門遠 18
號 962
卷 5

朝顔日記卷之三 故芝叟遺話

七回 月

柳浪 著

今茲秋月弓之助が娘の深雪、青春破瓜よもふアーハハ父
弓之助佳婚ととりて、おと小妻あはせんと。渾家の水青
もろとも多方針な費や。詩歌茶香の友どちふとへた
のゝて、才顔双全人とどたげぬける。弓之助が和歌の伴小
加茂祐包といふ人あり。忽日園崎村よ来る。弓之助よあ
ひていへらく、かねど足下の望まきける才子こそあん
ねま。と東福寺の月心和尚といつごろ浪士宮城阿蘇二郎
といふ人よ。嵐山よて邂逅しふとぬかさる。舟うけてたまも

の巻五加原 卷之三



の音よあそぶらむ。あらしのやゆの花の本らうと。とよと
たるふと。またそのゆべの夕詩は渡月橋頭人渡月。月
明還在緑波間とつくまを。その氣宇の軒昂いさらふも
いとす。才器ハ古今獨歩おと申とまき。下官ハいまど
その人見見ごまども。ふらふとくうららぬき月心師の語
ふ。いつとまハあらべうらず。心師ハ緇徒のふとぬ。誰をべ
ちふまかるべき。氷人ハたのめて。媒話て見たまふべいと
叙らまける。弓之助ハもとよ。祐包の篤厚とよく知
居まば。つねおとの憩言といねもはず。ふうくその語ハ信
ト。そいよくもまつせたまへ。さもあらばひ蔓ともとめ
て。かたらひ見侍らんとあつくその好意ハ謝し。種々歎

待てど回しける。さまどもふの弓之助ハ生まつきたる。懂
密よて東福寺の月心といまたしと友垣ぬる。夏中山
籠りして。戸出せらますとまう。ことごとくたづねおれて。和
尚の學窓は偶坐して。半日の閑談とふし。その流いでよ
阿蘇次郎ハ人品とどたづねける。月心いへらく。かの宮城
氏ハ今の世の英雄よて。まこと小王佐の才ある人か。詩
歌の類ハその緒餘よて。こよふのころとふえし。かの人の
うたよ。
うとふし。のふぬ。ふのうへよほもまじし。かたりある。父の心ため
さんと詠めよ。ふの歌のあつろいさを。翫味見たまへ。大丈夫の
氣象よあらどや。弓之助まよその品表を問ふ。瑕ふ死壁

と知りしめせしゆふよぞ。弓之助大よよろこび。まぐりまご四
表八表りらかたらひてかへるぬ。かくて弓之助次の日も
渾家水青等とまのさとなかたを出入し。宮城氏は親き
人もがふ。氷人は央てんとつぶやく。日比宗の家よあつろや
とく入来る醫者よ。橘雞菴とつふしあり。とつふしこの
坐よ居あいせ。ふまをそとて酒酸鼻なたおめりし。そい僥
倖ふるまことあま。その宮城氏ハ不佞とい仔細有て
日比親しき中らひおると。そまよ。馴染る由ともあらま
しほげ。不佞良媒なたさべたやとく事な成おほせ申
さんと。またま貞して阿蘇次郎が才と。標致とを口小ま
まらせて。褒るまことふらう。説得て天花も乱墜

るばりまおと。弓之助が性として。かくうたたる調子小
のらさまは。いづまは足下の紹介と蒙りてん。とま
おがら一應その人品なために見たるうへのおとふみ
そとて。最愛の一個愛玉おま。かく大事ふかけて
かいくも道理をま。かくて日比親しが。弓之助ハ今日
も省よ来る。鶏菴とごりて。とや八月も二日三日立ぬ。
来る望の日ハ。こら宿よて賞月筵と催し。縉紳家兩
三位が請ご奉り。例の祐包月心ふごとも。招ご待ら
なす。幸のをとふま。御註の阿蘇次郎とやらんとも一
坐せしめて。その人品とも見ま。けま。貴老多勞お
から。宮城氏へ来ん望の月の筵ハ。かからず。光貴たま

へとどが語と傳ふはほどよくいへらへたまはまこと宿題
成とへあしだけてはうけける。雞菴いふまこと允容やがて
岡崎成にち出ぬ。鶏菴もと秋月が内福成よくことりある
也。事成ハ一廉の媒表成志てやらんと。をむろふ例の
火成動りし。しや手ふ取たるものやうふ。ふどく楊
揚とちて下河原よいたま。宮城阿蘓次郎よあひふとく
笑負はる。志うくの由をつけ。来る十五日小ハ秋月成
の高會よ往せたまへと約成ふしける。さてまた岡崎
ぬるむをりの深雪ハ宇治よて眷戀し情即成ハ筑八が
その名成書はけくまへ。宮城阿蘓次郎とつふことを
志ま王。今志もその人成婚よせんとの私意よて。多君

月見の支度せらるる成見て。よろあぶことか。さ王ぬ。媽の
水青ハ乳媪の真柴。了衆の浅香とも。顔見合てうちこら
へ王。とまども水青ハ物がと死良人成おそま。前よ阿蘓
次郎と螢狩よていであひとるあたと。ばふりか。侍女
どもふも口どめせし也。たいふを私下よて。うや死あひ
とぬいそしといさそたち。何とぬ。いさましけふ。見え
小ける。かくてその日ふ。さ王けま。バ。女兒深雪ハ朝まだき
よ起いで。紅粉よ。燻脂よ。いと靚。又粧ひり。ご。搔頭
い。つを小せん。玉簪。そのよろし。か。るま。と。や。ふ。ど。う。ち
躊躇。鏡臺よ向へハ。真柴ハ小姐の背成。ほどく。か
うちたく。さて。あ。や。か。王。もの。ふ。と。べ。ま。ふ。ど。う。ご。を。あ。とい。ハ。

浅香もまたふらやましくさうらへるどそののりして。闔門
 ざり居たりけり。日も斜に顔ふくある。橘雞菴真青
 小ふアてひけ来り。喘吁くさひひけるいさして。遺憾あり。
 かの阿蘇次郎ぬし。俄病づきて得まゐるがごとし。よろしう
 ありとてそくをよと申さぬ。今朝顧しときハ感冒もあ
 らと治しゆへ。いぶん伴ふひ往てんとて。月代を包み居
 らましが。後ハ誘ふゆきし時ハ。いふも大熱さし出て。
 頭痛劈やうふアとして。高枕ぬかして。うち呻吟居られき。
 脈が診ひさうらうふ。一かこならぬ再感の邪勢ふまば。黍ま
 めも無理ならず。さきど阿蘇次郎ぬし。重き枕をわけて。あ
 の体ふまばとて。もえまゐらず。さきながら。御兼題ハ詠に

ことしてべる。今宵の東人へぞけくまよし。やううさきしと。
 懐裏さぐりてとて出。弓之助へ通しける。弓之助志まぬ
 りけとて志むしあさきて語か。渾家小姐も。などし
 望みぬし。花が風よとらま。さやけき月の黒雲
 小掩ましあちして。天さへ志むしかきくも。いふうち
 志りてぞ見得ける。弓之助阿蘇次郎が兼題のうことを
 讀ば。うつくしき手して。
 山のとれんう。宵をかまひかくもがみ入うさふ。たつ月の
 かけ春雄と名が志るせ。志まぬんその日の秀逸とてここへ
 ける。明もバ雞菴まゝと入来りて。前宵のふとねど問ける。
 弓之助ハ雞菴に對ひて。ちふべの會ハ賓客たちも宮城

氏と一坐せざるを遺憾ふると申さまき。おの宵の賓客の
詠草ふると。己夫婦がよき歌とも交へて雞庵に廻し。
つめてもあらばふも宮城氏へ見せてたまはまるとたの
みぬ。おのひまふ深雪ハ。ごがふもひとのべたる一首の戀歌と
短冊よきたり。雞菴がたら回る袖かひまるとり。おまふも
のふまると。かの懐紙の中ふ巻おめてこととせ。雞菴ハ何
の氣も洗うぞ。そのまゝ懐抱よと一い。慌忙下河原よ
いた。阿菴次郎が容体候診て。弓之助が口詞とも洗
たへ。件の懐紙とさ一おきて回さける。あとおて阿菴次
郎ハ懐紙どもくまうへ一覽中ふ一枚の短冊。ことまれば
ふぬとまあげ見ま。

ふうとてい末のうとまぬいうふせんおもつけ魚たつ字の
川霧とかひたる墨痕いとほゆけし。阿菴次郎はくしとら
ちまも。おの歌ぬしの名深雪とあるせ。日外宇治よて
めいし深雪おるふ。おの歌のあふもぶうしとひとま
あちて思案のかうべとかたふけぬ。

七回 假

そのち荻野祐仙ハ醫學修行せんといふ。洛陽ふの
ぼ。三本木よて川つきの院落と借。おのころ拙はさてあり
ける。橋雞庵ともはしおくいでめひらる。雞菴ハ當年の
背約なまひぬ。祐仙もとよ。蠢愚しものおま。早く
雞庵が倭辨よたらま。ま。懇。結。交。ける。一日雞菴

医疾
 仙三本木
 の假舎
 了て橋
 是はうり假
 とねり
 可
 志



宇金鑑
 所月列曼
 東生

布帯と今布帯
 今高抱布帯侍
 堂お命乃る徳今
 何処一尺七良立
 月園 田園

祐仙ゆうせんが三本木さんぼんぎの旅亭りょていよまた話わけるハ昨日きのうハいと遺憾いんげん
 ありとこそありつと惜おぼむべし。一簾いちれんの祝酒いっしゆハ契ちぎとこふひれと
 呬はやく。祐仙ゆうせんいふりくたもひ。その何等なうらのふとありやと
 問とけまば。雞庵けいあんいへらく。とが友宮城ともみやぎ阿蘇次郎あそじらうハ。秋月あきづき弓ゆみ
 之助のすけとふ人ひと。一個いっぺん女兒むすめの誓ちかとせんとして。まづその人品じんぴんハ
 見みまくおもひ。月見つきみの會あひハ催もよほし。不佞ふべいハ紹介しょうかいせしめて招まよ
 かまし。か。巴よよその日ひハおぼえて。阿蘇次郎あそじらう病いひつとて往ゆらぶ
 ちへそのこと遂つひに水みづハなま小こき。噫あかの阿蘇次郎あそじらう福分ふくぶん薄うす
 うして。絶世ぜつせいの美人びじんハ占得おぼえぞ。と。只ただ管嘆息くわんたんそくして止やま
 ざしける。祐仙ゆうせんいへらく。そまハ岡崎おかざきの秋月氏あきづきうぢよて。その美う
 女めの名なハ深雪ふかゆきとふふとまでともま。雞庵けいあん不ふどし

あやしと。いふふもま。おぼ。貴邊きへんハいふふして。よく精せいしく
 去さりたまへる。祐仙ゆうせんなくそゑとていへらく。小生せうせいといつぶろ清せい
 水みづハやうて。時とき舞臺ぶたいよてゆとちがひ。その人ひとと見たる
 が。今の世いまのよの薄雪うすゆきともいふべく。と。まき。何なにどうつム。か。と死し。
 そのとき小生せうせいハの姐いもうとがたとやとたる標致ひょうしと見て。肌肉くはう酥そ
 麻あて酔よるがぶとく。そま。より夜よとして。夢ゆめ想そうせざるは。し。
 その日ひあ。つつけて見得みえかくま。と。慕こひ。あ。か。の人のとめる。
 岡崎おかざきの莊院じやういんとも認まげ。且隣かつらの老婆らふハ問とて。その苗字ななざをも
 去さりぬ。は。ぬ。ぐ。清水しみずの圓通菩薩えんつうぼさつハ願籠がんろうして火食ひものた禁かせ
 一いっ奇特くつてきよ。や。今日けふ満みざる日ひハあ。た。足下あしもとよ。と。ま。の
 手て蔓つると聞きいたせ。ハ。ま。さ。し。く。赤繩あかじゆのあ。る。と。ぬ。い。し。

いりよ鶏庵子。その秋月氏へ小姓に螟蛉に媒ね。鶏庵をて
 笑が忍てねとや。那の阿蕪次郎と祐仙とをくらぶれ
 ば。まふとふふも。雪と墨おるらぐひよ。祐仙ハ極て醜き
 漢子ね。さきとも鶏庵往年。まの祐仙よ。金子借り
 こそし。債あるもへ。をしりちほけよ。和君ハ不男ふ。ま
 ぶの縁談。さきふべらどといとま。おる不どくらひ
 見るべし。さきおがら那方よ。いまごその人ハ見らまねど。
 阿蕪次郎が高名に慕ひて。婿よせんとの準備ふま。まの
 とまハ。他人のふとぬいひ出しても。とても承引おう。これは
 祐仙いへらく。さもありらば小生ハ阿蕪次郎ふ。して。はま
 かまよと。のつびきおらず。せぢぐひけるふぞ。鶏庵も不どく

窘迫。さハのたまへども。阿蕪次郎ハ月代頭。お。和君ハ
 慈茹のふとと。髻のさよ。いりてたやとく。假おはと。祐
 仙いへらく。およと。前髪剃ことよ。かたから人といひ
 け。肱ぢりふる調度よ。圓金三十兩と。ま出。まづ
 まをハ當坐の賞標。ふ。事成ま。分外の辛苦。銭と
 まいらをべし。と。鶏庵。前よ。さ。い。お。け。ま。ま。の。鶏。庵
 黄白ハ。態。が。る。ま。と。青。蠅。の。血。を。ひ。さ。が。る。が。ぶ。と。く。お。れ。ば。
 あ。と。い。野。と。お。ま。山。と。ふ。ま。先。ハ。菟。獲。の。兎。お。ま。と。直。ま。金
 子。と。う。け。お。ま。和。君。さ。た。も。ひ。た。ま。り。施。と。べ。と。手。段。も
 あ。ま。お。ん。と。間。よ。合。と。い。ひ。て。そ。の。日。ハ。こ。う。ま。て。回。り。ける。
 明日。鶏。庵。ま。と。三。本。木。の。借。儼。舎。よ。訪。来。ま。け。ま。ハ。佑

仙ハ頭ハ手拭てぬぐいよてまた浴衣ゆいふがら小出迎いせむかひて笑顔えがやつく
 きて。雞庵けいあんもは着きて。ともふうちこらひ。和君わきみもやと感か
 したまひ。頃このころの風神かぜのかみいとふかく。風流雄ふうりゆうも崇たかるおと
 よと戯たふむをけまば。祐仙ゆうせん手てむやく手拭てぬぐいなとまば。いつ
 の間まより元服げんぷく天突あましお。王居わがて。蟻あまるふ洗せんけ鬢びんせし。びと
 くおまば。雞庵けいあんハあま。そのおと。興きようととま。まば。呆あほう
 回まわへ。笑わらとへせず。祐仙ゆうせんハいとほま。うふ。ふとよく似合にあひ
 けらん。そやく秋月氏あきづきへ。はま。ゆきねと。只顧ただみたのとけるゆ
 へ。雞庵けいあんハ。とものおと。今いま十四五しご兩りやうも騙まか收おさとんと。計較けいけう居
 たまば。祐仙ゆうせんが。ま。う。月代つきしろまで。きて。ま。ま。て。せ。め。と。た。る
 ち。一日いちにちく。といひのむ。幾十いくじゅうの日數ひかずが。過とけるが。一日いちにち

祐仙ゆうせん清早せいさうよ。と出でうけて。雞庵けいあんが。ひ。つ。た。て。今日けふハ。せ。ひ。と
 も。秋月氏あきづきよ。引見ひきみと。ま。よ。と。さ。び。く。催促せうそくける。お。ぞ。雞庵けいあん
 と。今いまハ。逃のがる。語ことばなく。ま。ぶ。く。穿換せんかんして。祐仙ゆうせんと。う。ち。は。ま
 だ。ち。一。条。戻橋もどはしの。宿やどが。お。ま。さ。ら。ば。ま。づ。東山とうざんと。道遙みちのほろし
 こ。そ。と。伴ともふ。ひ。お。さ。て。四。条。の。板橋いたはしう。ら。こ。た。る。芝居側しばいがわと
 あ。と。小見こみふ。祇園林ぎげんが。徐々じゆじゆと。傍徨たわらひあ。ま。く。お。警對面けいたいめん
 が見みま。ば。五。旬いそぢむ。う。その。武人ぶじん一。個ひとの。小厨こちゆうは。草鞋くさじか。手てせて。南
 の。か。よ。よ。と。出来できま。ば。雞庵けいあん因果いんぐわと。口くちに。て。祐仙ゆうせんよ。む。ひ。あ
 ま。こ。そ。の。秋月弓之助あきづきゆきのすけ殿どのよ。と。う。ま。出合頭であひがしらは。雞庵老けいあんらうふ
 の。あ。い。だ。い。り。よ。見みか。ど。ま。た。ま。ひ。堀鼠ほりねの。ち。ち。や。と。ま。ま
 けん。絶たて。御尋おんたづねも。あ。ら。ず。と。い。へ。ば。雞庵けいあんも。ま。ま。よ。應おこす。か。れ

ふま丁寧に寒温がぬいつ弓之助かさねてかの宮城氏今
不どい御病氣も全快ありける。這方ハ何時までしくる
しからず。かぬらざ御同伴まで御入来ありといひける。祐
仙ハ適間よ。まゝに小雞庵が袖ぬひきて。宮城阿蘇次
郎もまゝに雞菴子をや。秋月大人へ引見らまよと。ほふ
やく。雞菴も今さらふよとせんをべねく。僮倅もまゝ宮城
氏病氣全快まで同道いたした。や。阿蘇次郎どの。
くやく。秋月大人へ名對面ありと。弓之助へいさあいな
ま。バ。祐仙ハ武人の身ふりなせんと。まゝにふりまゝ
衣紋が正し。小生ハ宮城阿蘇次郎と申ももの以来
御懇意なりむる人。日外の御會一のとうい。あや

ふくよ所勞侍まで得泰上いとさず。約奴をいさ失礼と
申。残念なぶく小いと。ささぐ大内の御七の子まで。藩士
のいさあいな。武士の口状ぬおぼえ居りぬえ。後ハまゝ
づい假粧をまゝいつ。弓之助もぬ見ると。大におどろね
やく。まゝに呆まゝに。世ハまゝかくまで揃よそりひし
醜漢もあるものうふと。とや肚裏ハ九分の不平を生し
おぼえど冷笑して。やく。語がさへ交へど。祐仙の志を
まゝに。まゝに。志に。顔して雞庵に對ひかぬて懇望せし
秋月氏ハはららざ御意を得。ふふ不どろ愧むく。い
途中小てい。ありまゝと清話もぬ。が。と。那方茶店まで
一献をもちめてん。誘たまへと強よ招けま。弓之助

いと不興氣ぬまは、懶一懶中村屋が店よあかき。葎簀
かくまこも。三個うち円居て、説話らふ。雞庵ひひとり心苦
まり、いまや祐仙が馬脚を露はすりと手よ一把の汗を握て。
いつろ、頬あうく耳やてて、不どし針の筵よ坐とるどく
活たる心地もふりてけり。やがて當壚ども、種々酒肴を
拿来て排とく。祐仙は上をたての青書生ぬまの十分得
意の顔色よて、ひたをら東人ぶるとはく。弓之助へ盃世
ていたらく、おねいご武忽よ且野趣ふるおと、つふそりておく
手酌をとると。潤たる銚子かたむくる。袖口より匂ひ袋のふ
ろひいでたるぞたうし。祐仙は何か弓之助への款待よと。
日比おのづ同士の醜態ぬあらいし。田樂ぬ串ぬがら、犬小
喰として王といへといひけり。犬よあたへんとして、あやまて
膝よ墜せしぬ。拾とて喰ふど、沙汰のかど。お小を見
えける。弓之助はあまらの舉動ぬ見て、まをく、謗をわ
らひ。這奴ハ世より名盗人の類ぬらん。本領ぬ試して困
せんとんと、即坐よ七言絶句ぬ作て。會面の情ぬのべ和韻
ぬ賜はるべしとをひけまは、祐仙もあまの及第よひくと寤
迫て。おやく韻字ぬ次で、達者ぬるところを賣弄さんと。
焦燥いせくほど趣向うらまど、のつ、そのつ悶搔といへども、生
得たる鈍漢、あまのたたき、あまをよお親ぬうらむ、あまのうら
ま何おとぞおまを、あまのまが親が、才智ぬ澤よ産けざし
腹立かす。ひたをら小頭ぬかたむけて、るるしひまとや、半時

ばりてふして。からう志て作らあけ懐なる半紙は蝸牛の
信たる痕のおとく。滅多書して。あはぐさーいたせば弓之
助とてあけて。去の詩と看る僅々。平仄のあへるまで
ふて。机むかませぬ未熟と。唐詩礎明詩礎たのそねら。
源垂児の作もあつとを。そのうへ墨蹟の拙さ。宛も釘
とまが時たるやうね。弓之助たらまち氣色と損じ。
遠は持病の疝氣の起を。謝語さへとくくみして。
その坐を蹶たて。佛頂面して。去。岡崎の宅よ
歸。氣憤々的書齋ふとを。渾家の水青ハ女兒
をろとも出びつへて。良人が氣色のたねねらぬととづう。
弓之助ハ眼血どーいさままをけく。やよ水青はねく

眼とも噂せし。阿蘊次郎ゆよ。今日はどめて出あひた。水青
水青いよろあびて。とまはまづ幸のおとふとべ。さぞりし
美丈夫よてあはけらん。弓之助うちをらごら。ねえば
うかるふとと。丹波猿ひとー死下。這奴虚名と責
弄。身の活計かせんと巧びままけーからぬ大騙局。雞
雞庵りも雞庵り。とまよ一盃養せた。その證據ハふれ
就見よ。去の詩の作らごまはとさんぐ小罵。いり小志
ても心を得ぬ。祐包月心のともがらね。あの衆よ。かぎ
つとぐろねるふとハ申とまぬとづねるよ。かの大騙局。り
か人の志らぬ。名歌妙詩と盗たくいへ。己ガもの顔入。誇り
しゆへ。さむくの氣もましく欺負し。苦く志とまといね。

とほひよねきばらとらふまば。水青ハ不どく合点やうず
その詩ハとそわけ見まば。詩の意ハいどあらず。その字の
かとらひとととねげふるまど。良人の憤ヲハ埋ふるまども真
の阿蘇次郎が書のことまといハ。鷺と鴉のたがひねま。まハ
必定いりふる奸者ヲ。阿蘇次郎ハ假粧て。良夫と欺ま。まハ
推量せしうど。ありていいとまぬ時直ねるま。女兒深雪も肌
身とねこの朝顔の扇ハ。爹弓之助ハ見せまくねも。と字
治よてあひい。私下ぶとねまば。いとまたぐ伎養またへし。
母尸自と顔見合。頓口無言うちまほま。誥且雞庵園崎、
省よ来まば。弓之助家眷ハ吩咐て。内房へととさず。己は
病と稱して遇まま。雞庵とどく立んととると水青ハヤ

とらひとととめ。足下のこととえぬ人うね。いりよ家公と
欺負して。假東西ハ偽賣らま。無杖まらとねま。と
膝ハ叩きてねだまける。まの時ヲ眾どもハ右左よま
雞庵ととらへ。耳ハひく。凡う。またらう。ふさいおひまど。
さしもま鉄皮ふる雞庵も。不どく面目ハ失ひ。その
坐またまま。かぬて。命からく逃へまぬ。さてま家へ
面ヲ見ま。祐仙待ふ。居て片時も早く。園崎へはれ
ゆけと。催促たつま。雞庵ハ進退あ。ふ谷まま。まも。
その色とも見せず。ねるほど秋月氏へ。よくいひ。み
まきたま。何時まても訪ゆきたまへ。一寸逃ま。いへ。
祐仙ハ。まも。ま。ま。ま。心得い。ま。園崎へ往て。秋月

阿蘇次郎

玄關けんかんは案内あんないす弓之助ゆきのすけもなまきくよ。そく神かみたて
 いやが。雷守らいしゅなほうひておひくへつ。祐仙ゆうせんはいくとび往
 ても。まうあまけるもへ。さむか。星たけの狸ねこ呆ぼけふきども。やう
 やくまをさと。血眼ちまなこはねて。雞庵けいあんが許もと来き。百
 般ばんねと。星ほしふと吐とて。雞庵けいあんがはとり取逃とりのがれせし二十兩にじゅうりょうふ
 今度こんどの賞探しょうたんと。併ひらこ。五十兩ごじゅうりょうだ。今返いまへせとの。ま。腕うで
 をまく。星ほしあげて。雞庵けいあんはむさぶ。星ほしはき。組くみつ。轉ころんつ
 雞庵けいあんは。志こころた。く。打擲うちなげせら。おがら。やうく。小懸せうけんし
 て。さ。あ。ら。ば。ま。づ。賞標しょうひょうの三十兩さんじゅうりょうたけ。あ。づ。け。先まへより取
 回くわい。明日あした返濟へんきま。あ。ら。す。べ。し。ふ。ん。ね。く。欺負たぶらかす。は。し。
 その夜よは。家伙けあひと。て。賣うり。て。ゆ。と。さ。さ。ら。す。逐電しゆくでん

せ。王おう。憐あはれむ。べ。一。荻野祐仙あひのゆうせんう。ま。ま。は。き。さ。た。る。愚おろ蠢ちんと。ハ
 い。ひ。ね。が。ら。た。く。一。場ばうの。色慾しきよくの。た。め。己おのれが。拘く口くちと。と。死
 ま。へ。ど。一。塊くわいの。天鵝肉てんがくが。喫くせん。と。して。ま。う。く。奸者ませもの
 の。民たみよ。か。く。王おう。前後ぜんご五十兩ごじゅうりょうの。金子きんぎょが。失うしなか。り。その。業わざから
 ぬ。治郎頭ぢらうがしらは。剥むま。不ふて。王おう。ま。の。こと。已まよ。か。く。を。ね。く。世
 の。胡慮こしよと。ま。ま。ふ。ける。か。く。て。下河原しもがわらなる。真まことの。宮城みやぎ
 阿藤次郎あとうじらうハ。その。所ところ。勞ろう全ぜんた。く。爽さわや。き。け。を。バ。さ。い。つ。お。ろ
 秋月弓之助あきづきゆきのすけが。月見つきみの。會あひあひま。ま。ね。きた。る。その。好意こういが。謝あやま
 せん。と。袴はかま外そと套たてか。と。立た流ながは。打う扮はん今いま日ひ岡崎村おかざきむらを。た。づ。ね。
 秋月あきづきが。玄關けんかんよ。了しま。物ものま。う。と。て。宮城みやぎ阿藤次郎あとうじらうよ。て。く。べ。王おう
 秋月大人御宿あきづきおとなごやどよ。お。い。さ。バ。御對面ごたいめんが。お。ひ。侍さむらいると。い。ひ。入い

秋月大人御宿
 御對面がひ侍るといひ入

ける。了。眾淺香ハ、六の声ハ洩聞物の間より闕窺して、
慌ふたゆきはし入て。奶々姐々ふもけげ志らせ。闕
門へそくとしてよろまひける。弓之助ハ声ハこげまし。
執次と叱りて。例の仁うこせたる。番守といへど高やうふ
叫びつ。阿菰次郎とやく聞くと。そのまう口扶云捨
一礼のへてぞたち出ける。程へて阿菰次郎が下河原の橋
居。肥後より脚力来り。事あるふし。夫の書状着次来
夫のものめしほき。即日下来るべしといひ越しけるゆゑ。
阿菰次郎慌てて橋居かたげけ。歸心矢のおとく。夜ハ
日ははいてくたせける。夫の縁故ハ。阿菰次郎が父廉助早
く死し。獨の老母。九死一生の病ハ卧露命且夕は迫りし

かバ。一門の人々ハ集りけるふ。あたりも和田三浦の支屬
のおとく。如少の児女まで弔筭まば。九十人ハ餘き骨
肉なり。世はあろろふとして。そまう記念分して後
老母ハ一坐孤見かぐし。やがて末期の盃ハ酌かハ一つ。この
あいごまば一坐もまづまて。何とねくうちまめぬ此
時見しらの娘ども。病床に居よ。母御前今ハの際
まで。いさかかの逆事おく。一個の孫子とも。ささだてたま
はず。十分の榮耀果報いそぐき御臨終おまバ。夫の世ふ
おもひのこまハ。あらせたまハし。祝なくさめけまバ。老母
おもき枕とあげて。今しもそるとたちの申さるくと聞
とが臨終果報十分なりと。されといろくおらバ。さうに

一個の遺骸こそあま。この子阿蘇松ハ一度御國に
まよ。今よその安否松ならず。互よ御上を恐
ゆ。雁のたよもたえしてた。夏人たらがひ。こ
婦の愚痴未練いま。六の程よ。佐ら。お。たる九十人
の人よ。零落ゆ。阿蘇松。た。一目見て死
た。とおぼえど。声。た。雨くと泣け。その道
理よ。よ。坐よあるか。一。悲嘆の涙ど
くよ。ける。人々。の動静。見よ。志のひど。百般商議
せ。う。よ。き。傳。と。央。御側室。雲居の御方。た。よ。
ふ。く。愁。訴。た。よ。び。け。ま。ば。雲居の方。よ。う。と。も。た
あ。ま。と。ね。不。と。ま。て。み。の。ま。と。ひ。そ。う。よ。殿。へ。う。か。が。ひ。た。ま。

ひけるよ。菊池殿。仰。す。は。い。渠。が。あ。と。ハ。自。盡。代。の。追。放。
お。り。り。か。へ。す。あ。と。ハ。か。か。い。ぬ。ぞ。よ。と。ま。り。け。ら。ま。ま。ま。で
ふ。も。罪。あ。り。て。他。國。せ。い。も。の。ども。晝。間。ハ。憚。り。ぬ。れ。ども。
夜。ハ。そ。う。小。潜。ひ。来。よ。し。無。状。か。る。奴。を。ら。お。ま。ば。家。老
ども。ふ。ま。う。し。け。け。と。つ。と。查。問。よ。か。ぶ。と。づ。か。ま。ど
も。お。よ。そ。國。城。治。る。ま。と。ハ。重。箱。と。ば。さ。ら。と。用。ず。
摺。木。よ。て。滌。ふ。が。ぶ。と。く。す。隅。々。ハ。ゆ。き。と。ら。ぬ。が。い。ろ
ま。と。も。の。ぞ。と。あ。り。ける。み。ぞ。雲。居。の。方。よ。ま。と。や。く。み
の。内。意。と。ま。う。せ。た。ま。し。一。門。の。も。の。ども。大。い。よ。ろ。こ。び。
さて。こ。そ。か。く。急。飛。脚。た。て。て。俄。よ。阿。蘇。次。郎。と。呼。ぶ。
下。した。る。も。の。お。り。さ。て。も。宮。城。阿。蘇。次。郎。ハ。取。も。の。と。

こゝろあへど都なたちしぐ程おく故卿肥後の國よ下
まつき、夜よまぎまきて、紅鶴林の莊院よいたし、旅装
のまゝおて、母の病床よりうちこをまへ、親族並居たり、阿
蘇次郎、母の枕側よりうげき、阿蘇松よてん、御氣色
はいりおあらせたまふとのふ、母ハ聞よし、おハ阿蘇松ら
おつうーやと、待あがきたるこが、見の顔、一目見るよし
莞尔とこらひて、眠るがぶとを、往生せし、おの時人への
哀傷ハ、くぐくまけまへまるとぞ、中おも阿蘇次郎ハ、紅
涙堰あへど、声お放ちて痛悲と、喪のうちハ、おくふりま
家廟の側よとぢおもし、七々の速夜おはとり、香花と
供して、百日の間、在をうぶとく仕へあげ、とてしも餘波ハ

はさせぬど、御構の身おをかへ、まご故のおとく國と
たちのと、南の関お出まへ、とある山家あり、おのことたし、
筑後の地方おあり、そよよ些の好のとのよたよして、
里人の見どもおあり、手習の指南お活業とし、母の靈
牌と設けておまへ祀り、這里よし、且暮東のうと、紅鶴林
お望む、廻り小双尊の墳を拜とぬ、とく志て一年の喪と
はしりおはしぬまへ、ちうきおまご都へのぼるべしと、その支
度とぞおしたしけふ。

八回 づの月

かくて、宮城阿蘇次郎春雄ハ、筑後界の南の関の外の方
おる春の町と起程、日おかそねて、長門の赤馬が関、小い

たゞ阿弥陀寺船を借て順風を颯てゆけど、不どぬく
播磨瀧明石の浦よそはそふなる。まのちふべ後背の山
よま、こづり小扇むりまの雲おころと見えーが、刹那小天
かきんもまあたしも墨を潑らぶとく一陣の暴風吹ねば。
波濤山のぶとくねこま。刺へ神鳴ととりまて。もの凜はじ
き光景かま。時ばりまあまて雨歇風絶て。海のかごま
うちふぶとて。遠水長天と一色の浅きとまふとまま
たまやぐて一輪の寒鏡雲のたえ間よま轉び出所ハ
名たぐる須磨明石對面のかと淡路島蛇のぶとく
小匍匐阿波の眉山黛のぶとくとやりねま。まの時阿
蘇次郎ハ舩ふよま眺やまけるが、猛然と想出しけるハ。

往年宇治の螢狩よ。はうらども絶世の美人ハ奇遇
し、がそのとまも。かごうまさやけま月の夜かま。が
所ハかこまど今月今日。そのぬーいいう小ねまけるぞ青
春破瓜頃かま。今比ハ齒をそめ袖をほめて。誰が金
屋の花とふかまけん。その後手小入一首の戀歌ハね
かまての末のうき身かいう小せん。たもうけ隔宇治の川
霧中たゑくの霧たち人。その名深雪と書たると。懐
紙よ卷そへて。来せし。まま小真情あまやねしや。あつ
かしの都鳥。まと問よしも波のうへま。さしうつむけハ襟
もと小。冷まるとねちさる苔の滴はたもいす仰く後背ハ千
石船の水押の下。原来前の白雨小。かの船は繋合あはしう

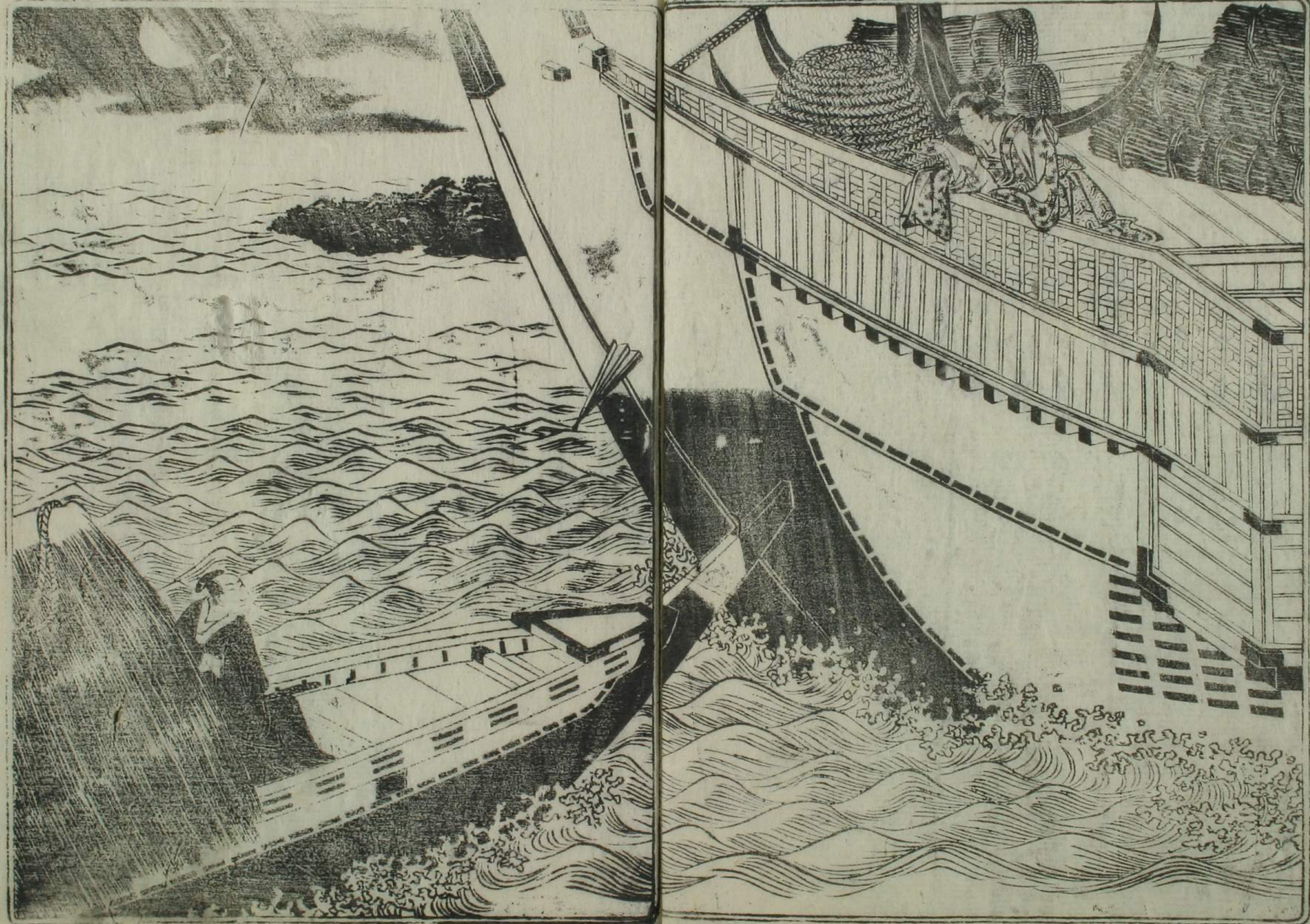
と獨ひとりおちけり ふうめやる。海面うみのうらはまをく 和わ恰ただも盟あはれの
 水みづのおとく。松まつふく風かぜも音ね絶たけつ。まはらふらふらぬら誰たれ
 ともしらぬひの心こころはくらの箏ことね音ねはたしう小隣ことなりの船ふねなり
 と。聞き耳みみたつる那方あきより。轉軸ころも撥ま爪づめと三兩さんりやう声こゑていまど曲まが
 とバねさざまじ。まづ情まなある音ね添そよて。まふとふ大絃おほげんハ
 嘈々さうさうとまて。急雨きゆうあめのおとく。小絃こげんハ切々せつせつとして。私語わづらひのじ
 といへるたもひあま。春雄はるおとハ志こころバ聞き入いて。たばえずと
 大涙おほなみだ小涙こなみだふふとち。身みより骨ほねは決まり。腸はらわたはたつばり
 了しまりて。曲罷まがのちまど音ねか。只ただ風清かぜあやく月白つきしろのま。
 春雄はるおとたのめやう。さてもあや。たあとうね。今いまの頌歌まじりうたハこれ
 ひら。三線さんせんの糸いとよあらべ。朝顔あさがおの曲うたなま。さるとい。

ねる人ひとのいふまを。わくる船路ふねぢは彈ひぜいぞと。そごらう
 たが。真夜半まよなかよ。たもひをまて居ゐたまけ。まの人ひと是こゝ
 別人べにんよ。あらず。秋月あきづき弓ゆみ之助のすけが。女兒むすめ深雪ふかゆきよ。ぞあまける。
 いふまを。今いまの船ふねよ。あまて。琴ことハ彈ひぜいぞと。つみこま
 よ。まを弓ゆみ之助のすけが。故主こま筑前ちくぜんの國守くにまもり太宰たさいの少貳せうじ殿のとの。一
 個ひとの淫婦いんぷお。蘭らんとつもの。た愛あいせらま。そまが。兄あに健卒けんそく傳でん
 藏ざうと。たて。國政こくせいハ任まかせらま。し。傳藏でんざうも。無頼むらいの
 匹夫ひつぷから。ゆへ君きみの虎威こゐと借かまて。古叅こさんの人々ひとびとハ。民たみよし。
 不時ふときの課設かせつと。かけて黎民れいみんと。苦くるしむ。まよまて。御領ごりやう
 内の百姓ひやくしやうども。一揆いぎハ企くわて。那方あき這方こた蜂はちのぶとく。お起おこり。
 袖そでが。浦うらの御城ごぢやう下かよ。はめりけ。和蘭わらん傳藏でんざうと。賜たまはるべし。

置訴なふと、御母堂紫光院殿の御心ほさよて秋月弓
之助と召面さま。その大乱と静むべしとの上意あり。弓
之助初國が出一時、再本國へは回らざとねひし。さ
その弓之助いまだ見姓たちの比御松籙の席よて祝言の
謠なうとひ損ト。已よ罪せらるべきふきいままとて紫
光禪尼その比、御蔭中よていと嫩やうよ新羅の前
とまうせし。殿へ御託言仰せらま。さまとて御執成
あるかへ干おて危きな助らぬ。その大恩須弥よて高
蒼海よて深けま。その度ハ曲て。御母堂の御内意小
またづい。忙ハしく支度なふし。岡崎の寓居ハ渾家水
青よ托してまをな完いせ。おとよて下て来るべしと手

筈なさどめ。おのをいまら。女兒深雪な具し。とてふれし
都なたちいで。浪花の港口よて國守の御手船に乗て
下りけるが。まも前の暴雨よ遇てこの明石の浦よ
泊居たるふつ。さてま。弓之助の娘の深雪ひととび
宇治の螢狩よて。宮城阿蘇次郎を眷戀し。ねかし
都邊よ拙ながらふ。とびめひ見よ。とねく。そのうへ
さる奸人のためよ。さまとげらま。剩ゆく。おとと
筑紫へく。ごまおけ。何日ま。こが情郎よあひて。ほしと
おもひ忘る。ひまもねく。ひとをらあく。かまは。心地こへ
例からず。さその白雨の怖さよ。羅ひき被てふ。あさる
小。やとらう。ちまづま。海面もねきた。と船子どもの

秋月う之助
う女見深雪
明石の浦よ
船泊しして
とらりす情
即阿婆茶印
よ環會



〇 明石加保 卷之三

〇 州二

罵しる女聞へともろくげよ起出し。船口よこり入る。月光あつく志て。白日のおとく。夜といとく更て人ふ眠。ふしたる小ぞ。あまらふにま琴。狐搦鳴し。こが情郎の記念。朝顔の唄。狐志らべ。慕ひ屈したると。ころの。かしら。ろ。狐ふくませ。そのあ。とげ。弾。阿蕪次郎。あ。の。曲。と。こ。た。は。ま。て。且。あ。や。し。も。且。や。し。も。た。い。その人のかづり。倭倭と京へ官あづま。のぼる。響者。と同船。し。ゆ。そ。ま。が。携。る。蛇。皮。絃。を。借。こ。か。を。抱。一。年。深。雪。が。母。水。青。が。宇。治。よ。て。弾。る。梅。が。香。狐。い。と。志。ら。妙。よ。あ。や。と。ま。バ。あ。の。搦。音。が。灰。聞。て。隣。船。なる。深。雪。肚。裏。よ。や。徹。けん。耳。が。側。て。眉。を。ひ。そ。め。聞。ハ。と。く。や。ど。その人め

とてねもぐえけ。し。と。よ。ま。あ。の。深。雪。ハ。蔡。邑。が。子。よ。あらねど。音。狐。知。み。と。比。ね。く。こ。が。情。郎。の。音。除。と。ハ。朧。氣。からず。猜。せ。し。よ。ま。や。と。ら。臥。處。と。志。の。ひ。出。踏。躑。して。櫓。よ。あ。が。り。欄。よ。倚。て。見。ね。ろ。と。よ。恰。好。阿。蕪。次。郎。と。宮。ね。一。切。て。窺。へ。バ。い。よ。と。や。け。と。月。明。よ。偶。と。う。ら。仰。ご。て。見。ら。ハ。せ。る。顔。の。ま。が。う。ら。ね。き。深。雪。なる。よ。深。雪。ハ。春。雄。と。ま。と。認。む。ま。バ。あ。い。ふ。つ。う。し。と。い。し。ん。と。せ。し。後。よ。つ。い。つ。間。ら。之。助。女。児。が。帯。を。捉。て。こ。を。危。ふ。し。と。い。れ。入。ま。バ。深。雪。ハ。や。る。せ。あ。く。こ。が。在。あ。と。と。志。ら。せ。ん。と。記。念。の。扇。子。が。と。こ。も。あ。へ。ど。春。雄。を。め。が。け。て。投。り。ら。あ。の。扇。子。あ。や。ま。と。ず。阿。蕪。次。郎。が。顔。と。ま。と。こ。と。ち。て。その

ま、膝の上よぶまで、阿蘇次郎はこゝろやおそしと拾
しあへどと一ひらと。月よとらせば、たほえある朝顔の繪
賛か。とまがみそ猜せおとく。さきつこの琴ぬしも。
深雪よてまけと。まをく深雪が真情と志。身よ
まりて感ドけ。深雪はたまさうりてへうよ語もかいたず
親よさうきし。うきなかみち父が熟睡を待
かねてやうく志のび出来ま。と枕樓よ。とこ覗けば
怖さ。とろし。さもねもはず。度と落音よ。阿蘇次郎ハ
突一驚して見てあま。深雪ハ三板よ隨たと。息
もたもろむう。玉の光景よ。阿蘇次郎慌忙、飛の抱
けへ。還丹がふくませ。多方とい。とけま。深雪ハ

やうくよ人心地はくよ。阿蘇次郎はまつと見て。
いとらまけ。けかうちまも。知し。めをうへいざ。しらねど。
妻が名ハ深雪として筑紫の浪臣秋月弓之助が娘
ふてとべる。もし。宇治の川舟よ。ふと眷戀たる
赤繩よ。その螢火ハ焦をねど。さう。ふくハ妻が
胸のうちよ。月見會しいとづらふ。いたつとたま。難
面ハ月よむら雲花よ風め。と媒人よあさむ。種を
のさまたげよ。あひよ。た。一とちの赤繩よ。た
しい。か。玉の緒し。不ど。絶人とせし。そやい
まど枕ハ。か。とねと。貞女両夫よ。ま。えぬ。操と。露
ば。と。憐と。お。と。鸞傳と。あ。て。たま。い。ね。と。

膝よいしとうちふして咽びいそはくときける阿
蘇次郎も深雪が心根とたしひやそその道理よ。こ
もとしていろいろ小出ぬる戀衣もやかさねまくれもへ
ども娶よかふらど媒あそ互よ武士の家よりまを
ふてう不正事ねをべきや我望が遂しうへまうるべ
氷人としりて表むきよまやいそん無事ふたハハ
折な待をよそやく船一廻らせたまへかさねて環會
てんとふどめとうして別をんとと深雪ハ恨の戻声よ
てかくまでおしいまたいし身のたまへあいてまのま
ふうへまとなふと曲しぬし何いまそ身の身ぬいづくに
もはまのねたまへしそまのま本國筑前小婦

ぬへ。芭虬之進とつしもの合當せよと無体なる殿の仰の
のさふらふぞやたとい命が失ふよし異夫よ見え候ま
しどままかくまれいざくはやくはまさせたまへとかさ
どけハ阿蘇次郎はいよ便ふくねもへどもと今姐くは
ほま退ハ御両親の恨なうけ世上の謗ないうよせん
さぬろろ短くおぼしそ病あそともいついて期とどに
のばしたまふうち小ハ仕様模様も待まぬまづく
船よかへまねとさまぐといひさとせば深雪いつと起て
いうふども申ても諾かひたまはすばせひしぬしさらば
ど一声身が躍らせちいろの海へは飛いらんすとは
阿蘇次郎阿呀て抱きとめさかどふおぼとここねら

いろふものぞとふまうせぬん。とと小節よめいって秋
 月殿の愛子をバ見殺しせんも不仁なる。合巻いと
 しかくも。いろ小汚名を蒙るとも。かく實ある情人とい
 うて泣きぬく見とつべとやい。かふらざとやまアたたよ
 ねと。制をる詞は深雪いおらぬ。居直まていひけるい。と
 とよ縁とまアとる母かまバ。かふるまとふてたらの
 一と。あつて聞たまはんふ。よろまびたまふハ治定なれ
 と。そらハ恙ぬく。君は從のくことぬ。た。一行書のことん
 硯があらバ。かしたまへといふ。阿蘇次郎腰ととふて
 頭ハ搔南無三寶前は。うとあいて。墨斗を海へしりし
 う。まハいせんと躊躇ハ深雪いとくよ。ととみらば

今一たび船よりへ。書おさぬのさ。ま。些の細軟
 とと携てまい。おんと。頭揖よ。まよちのぼる。阿蘇次
 郎は腰におさき。からう志て裏へ入。とが卧處いことて
 いそかい。く。書置おまらぬ。そのま。父が枕もとよじ
 とと。起んとせし。がまてまはし。もしやま。ふま。う。
 一生の別とふらんもはうま。か。今ハまた。一目せめ
 て父君の寝顔おが。心むか。まの暇をせせんもの。や
 とら躑よ。て見てあま。ま。か。ま。こま。いた。戀のミ
 小憂身ハやつし。泣ぬ。不孝よ過せし。ちえ。天の御罰
 や蒙りけん。父君ハ衾ひき被とて卧したまへ。御顔ハ
 拜むことうか。い。さ。いら。バ。御眼やさま。したま。い。い。い。

せんところへおいつ。躊躇かぐらおづしと。蒲團をこにし
まふとも。何れも知らずして。只をやくと森入たる。
その顔とほきくうちまもして。あら勿体おや。不義
いたづらといふてもおけまど。おれ即よそひとげん
と。おいとま申て出ちきさふらふ。不孝の罪いあるこせ
たまへあともてさぞや歎きたまひん。おごりおれやと。
声とのこ。さす別悲しとよ。おほえすおる涙の雨
父弓之助眼かさまし。娘風状心得どとそのま
裳うい流りわバ。おいかかーやと。娘ハ声とあけよくと泣
いとすよ。側取る書置と。弓之助とらんとす。深雪ハあハ
てしるよと早く。窓よと海へかけ出せ。ふのこの音に

侍女どもおへ底事ととち騒げハ。船頭おまよ眼覚
して。水子どもお喚起し。やとま地嵐が出たハ汐も
よきぞ。ちやく船出せと叫ぶ声。舟子ハおまよ激ま
さも。慌ふとめと働は。エイヤンガト連声して鐵描兒とあし。
やをら布帆お拽あぐまハ。船ハたちまち矢と射る
おとく。一瞬よ走去。阿蘊次郎が乗たる小船と
せつかよ東西おひきとりま。まよと良縁を隔ける。

朝顔日記卷之三 終



朝顔日記

七

